

編集後記

本号とほぼ同時に、東亜同文書院大学記念センター叢書第4冊『アジアを見る眼 東亜同文書院の中国研究』（あるむ）が刊行される。同書でも言及したが、東亜同文書院初期の教授であった根岸佶は、ヨーロッパに始まった近代が、アジアに拡大するにつれて摩擦を生じてきた日中間の経済関係から出発し、いかにして近代日本を世界の舞台で活躍できるようにするかを考え、そのためには中国理解が必須であることを主張した。そして、その研究成果として公刊された『支那ギルドの研究』『買辦制度の研究』（いずれも『根岸佶著作集』不二出版に収録）のなかで、中国社会の特質を西欧市民社会とは異なる「ギルド」結合に見出していった。具体的には、地縁・血縁共同体の拡大が中国人の、ここでは漢民族となるが、結合形態であると喝破した。

そうした結合形態は、中国共産党による中華人民共和国の成立によって一掃されたとの見方を余所に、根岸やその後継者の名に恥じない村松裕次は、ギルド結合が共産党と折り合いをつけて生き残るのではないかと見ていた節がある。そうした視角の正しさが、特に改革開放を通じて社会主義を放棄し、王朝体制の再来をすらうかがわせる現在の中国の様々な局面に現れていることは、言うまでもなからう。

そうした時に、「沙県小吃」に関する記事をネットで見つけた。日本人エコノミストのものだが、中国にも同様の関心を持つ者いるらしく、そこでもその由来などが述べられていた。それらをまとめると、1990年代に入った頃、福建省沙県で大流行した「標会」（無尽講）で大損をした人々夜逃げし、郷土料理の店を出して糊口をしのいだのが始まりだという。そこに県政府が生活救済に乗り出し、県内の郷鎮ごとに全国に店を出すよう激励し、県政府職員も退職して店主となった。県ぐるみの授産施設だったわけである。そして、ロゴマークを国家商標局に登録し、徹底的に地縁・血縁共同体の延長として展開した。店の名前に「沙県小吃」と入れることくらいしか縛りはなく、メニューも値段も店によってバラバラ。いまでは、全国に6万店以上、当然ケンタッキーやマックよりも多い。典型的なファーストフード店となっている。筆者も中国では時折お世話になるが、とにかく安くて味もまあまあ。合格である。こうした事業展開では、当然地元政府との関係がものをいい、店が軌道に乗るまでは地縁血縁的支援によって生活から営業指導、調理技術指導まで面倒を見てもらい、時には裏社会とのやりとりもやってもらえるようである。こうしたことは、根岸佶が『支那ギルドの研究』（1932）やそれに先立つ『支那買辦制度』（1919）、あるいは大戦中の読み物『華僑襍記』（1942）などで明らかにしてきた事柄ばかりである。要するに、書院の中国研究の現代的有効性というものであろう。

しかし、そこでこの話を終わりにしていたのでは、昔の研究は、先輩たちは偉かった、でしかない。それを、われわれ21世紀の者たちがいかに生かし、次の世代に新たな成果を加味して伝えるか、である。本号でも、先人の業績の研究、埋もれていた書院関係者の紹介、外部へ発信した講演の記録などを収めている。それらは、「先輩たちは偉かった」で終



「沙县小吃」ロゴマーク
（「百度百科」より）

わらせず、時代にいかに継承していくか、研究という検証と批判の営為の記録である。すでに愛知大学が創立されて 70 年を過ぎ、書院の 45 年間を遥かに上回る時間が流れている。今後のさし迫った課題として、書院 45 年と愛大 70 年をいかに整理するかが問われている。

今号は、そうした先輩たちの事跡をたどるものとして、英文ではあるが東亜同文書院の語学教育を中心に、アメリカの同教育との比較を行ない、書院の語学教育の先駆性を明らかにした研究についてのシンクレア論文、書院生の卒業大旅行が『支那省別全誌』などに集約される過程を扱った藤田論文、苦難の時期である日中戦争への従軍問題を扱った石田論文、また、本号ではビジネススクールとしての同文書院の役割の本命である当時の清国会計について、初めての研究成果を示した田中論文を、専門誌から再録する形で掲載させていただいた。田中論文の今後の発展を大いに期待したい。また、在籍した台湾人講師の悲劇を数多くの史資料から浮び上らせた千賀論考などを収めている。講演記録では、「愛大ブランド」、「近衛家と愛大」、「愛大創成期」などの各論を収録した。とくに「愛大創成期」は田辺課長が全国大学史資料協議会での講演記録で、旧制から新制への愛知大学の移行期を「愛知大学新聞」など多くの資料を駆使した内容の力作である。このほか、この 1 年間の活動報告では浜松での展示・講演会、当記念センター展示のリニューアル、平松画伯の特別展開催などをあげた。

2019 年度には、こうした成果の上に新たな展開を目指していきたい。

2018 年 3 月 31 日

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好 章